

この度、第 27 回県学会広報局では 3 月開催の学会に向けて、皆様と一緒に学会を作り上げ、盛り上げていけるよう様々な取り組みをしております。その一環として、昨年度学会において演題賞を受賞された先生方や諸先輩方にインタビューをさせて頂いております。

今回は、県士会会長であります田中先生よりお話を伺うことができました。



**千葉県理学療法士会  
会長 田中 康之 先生  
直撃インタビュー**



インタビュアー 

田中先生、この度はインタビューをお引き受け頂きありがとうございます。

先生はこれまでも様々なお立場で多くの学会でご講演・シンポジストを務めるなど、多方面でご活躍されておられます。

まずは、県士会会長のお立場としまして、県学会に期待することをお教えてください。

 田中先生

何はともあれ、第 27 回県士会学会の準備にご尽力いただいております皆様に感謝申し上げます。県士会員の皆様におかれましては、一人でも多くご参加いただければ幸いです。

さて、県士会学会に期待することですね。

私は学会が「自己確認」と「出会い」の“場”になれば良いと考えています。自分がテーマとして取り組んでいることや 1 年間取り組んだことを学会という機会を活用してまとめて、発表して、意見を貰う。そのことで自己確認ができる“場”が学会だと思っているんです。でもその自己確認をする“場”になるためには“他者”が必要です。この出会いは何物にも代えがたいと思っています。

県士会学会は、“県”という範囲で県士会員にとってそんな“場”になればと思っています。

そのためには、「県士会学会は若手が発表する機会」という発想からもう一段上がって、「若手は発表を通しベテランと出会える場」「ベテランも発表しベテラン同士の意見交換を若手が見られる場」「ベテランも若手からの新しい視点ももらえる場」という感じに、ベテランも参加したいと思える学会になって欲しいと思っています。

全国学会が法人学会化し分散したことは皆さんご存知だと思います。そうすると総合的な理学療法の学会はブロック学会か県士会学会しかないんですね。千葉県は全国 9 番目の会員の多さです。この利点を使わない手はありません。今後は、若手の登竜門ではなく、もう少しステイタスが上がるようになると良いと思っています。

どちらかと言えば会長としての意見は後段の部分ですかね。

インタビュー 

本学会で初めて発表される方も多くいらっしゃるのではないかと思います。

学会では様々な学びが得られますが、発表したからこそ得られる学びもあると思います。

先生が過去の発表を通して、現在に活かされていることなどがございましたらお教えてください。

 田中先生

私が、今、こうして多少なりとも地域理学療法学の分野でいろいろと関わらせていただいているのは、正に某学会発表があったからです。

私は、理学療法士になって3年目から八千代市役所に勤務していました。市役所での勤務は病院の臨床とは全く違い、日々不安との葛藤でした。そこで一念発起。「このままじゃオレ終わっちゃう」と思い、研究なんて中々できませんから業務報告的なこと、でも調査票調査的なまとめは少なくとも行って、という感じで1年に1度学会発表しよう！と決めました。

で！忘れもしない1996年（平成8年）の名古屋での全国PT学会。ここで、はじめてポスター演題というのに挑戦したのです。理学療法士になって4年目ですね。ポスターの貼り付けをしていると周りは職場から複数人で参加されていて、楽しそうに貼っているわけです。私は一人職場だし、そもそもポスターなんてどう貼ってよいかもよくわからず、嫌な汗をかいて悲しい思いをしたことを今でも覚えています。

いざ！発表！となったら、まあ、思いのほか聴衆が多く、タジタジだったのですが、それを聴いていただいた大阪府大東市の山本和儀さんが、その部下である逢坂伸子さんを通じて「今日、行政の理学療法士が集まって飲み会があるからこないか」と声をかけてくれたのです。私は、一人でしたし、なーんも予定はないし、しかし、全くの初対面で「この人たち何者？」状態。でも、折角だから「行きます！」と。

時間になって行って見たところ、行政だけでなくその当時「地域」と言われる領域で活躍されていた人達が3, 40人かな、それはそれは凄かったんですよ。いろいろな人たちと話ができて、あそこが私の原点です。

山本和儀さんは、もう亡くなってしまっていますが、それこそ地域理学療法・地域リハビリテーションの先駆け、レジェンドです。この人に名前覚えてもらうために必死でしたね。勉強したくて。逢坂さんは今や地域領域では突出されている方ですよ。

その時に出会ったたくさんの方々から、「お前面白いね」と言われ、その後、いろいろな研究事業や研修事業、そして書籍や雑誌の原稿依頼とお仕事をもらい、協会の中でもいろいろと仕事をさせていただき、そのたびに新しい出会いがあり、「人財」という掛買いのない“財産”が雪だるま式に増え、今の私が形成されているのです。

あの時に、ただ学会に参加しているだけでは声はかけてもらえなかったわけで、あの時の発表が正に私の人生の転機だったのです。発表の内容は大したことなかったんですけどね(笑)

インタビュアー 

今年度学会のテーマは『理学療法の“シン”を問う』です。

先生がお考えになる“シン”、またその“シン”を選択された理由をお教えてください。

 田中先生

シンね…

いろいろに解釈できますよね。ゴジラ、ウルトラマン、最近は「シン・ニホン」が話題かな…  
難しいな…。

「信」と「親」かな。

理学療法という学問は、結局、「人」なんですよね。対象も人、実施するのも人。

理学療法を「信じ」、そこに自分のこれからの人生を託してくれるクライアントがいるわけですよ。そして私たちは理学療法を「信じ」治療等を行うわけですよ。さらに、そこにはクライアントと理学療法士の「信頼」があり、理学療法士は職場の他職種などの関係者と「信頼」があつてのチームができるわけですよ。そのチームには「親和性」が必要になります。

チームとしての取組み。当然、人には個々に正義があります。十人いれば十通りの正義がある。自己の正義こそが真の正義と履き違えている人は、実は相手にはその人の芯が見透かされてしまい、表面的な信頼しか得られず、気付いたら裸の王様状態ということはよくあることと思います。これは職場でもそのほかの場面でも同じかな。そんな状況では「親和性」は生まれませんよ。親和性がないところには相乗効果は期待できないでしょう。

慣れ合いの親和はダメです。それは絶対に。しかし、信用の先の親和性があることで「この人に任せられる」「この人に任せて失敗だったら腹切れる」と考えられると思います。その親和性の先に相乗効果が生まれる。理学療法の効果が上がる。と考えます。

これは理学療法というよりも理学療法士なのかもしれませんがね。

だから「信」と「親」かな。

インタビュアー

最後の質問となります。

コロナ禍、学会開催方法が対面式からオンラインへ変化してきました。

先生がお考えになる学会の楽しみ方など、是非教えてください。

 田中先生

冒頭で話した人との「出会い」はなかなか難しいかもしれませんね。

でも、学会って、同時並行的にいろいろなプログラムが開催されていますよね。対面だと同時刻に開催されているプログラムは一つしか見られないですよ。でも、オンラインでそれがオンデマンド配信なら、その閲覧が可能ですよ。そういう意味では自分で普段の対面学会では見られない演題や講演等との「出会い」は楽しみですよ。

あと、これまでは時間や距離の都合で学会に参加できなかった会員の皆さんは、少し気楽に参加してもらえることができるのではと思います。しかも時間の都合でコマ切れでないと参加できなかった方には良い企画ですよ。

でも、ホント、準備に携わられている皆さんには頭が下がります。ありがとう。

田中先生、丁寧なご回答を頂き誠にありがとうございました。

今年度も多くの先生方にご発表・ご参加頂けるよう学会準備委員一同、鋭意準備を進めております。

皆さまの学会参加、演題発表を心よりお待ちしております♪

📧 学会ホームページはこちら 📧

<https://procomu.jp/chibapt27/>